

## 北海道新聞

## 平岸の歴史を訪ねて

縄文・古代史編

## 第14回・縄文時代の平岸④ 遺構からわかること

平岸の縄文遺跡からは、土器や石器といった「モノ」だけでなく、「遺構」も数多く見つかっています。遺構とは、人為的に掘り込んだ穴のことで、住居やお墓、貯蔵庫、落とし穴など様々な用途に使われていました。その多くは、用途が特定できないもの(ピット)ですが、形状や出土物から用途がわかるものも見つかっています。

## ～落とし穴(Tピット)～

天神山遺跡でみつかっています。他の遺構に比べ、穴が非常に深く、溝状に掘り込まれています(図1)。当時は、おそらく穴の上を枝や落ち葉で覆い、周囲から集団でシカなどの動物を追い込み、穴へ誘導したと考えられています。

## ～お墓(土壙墓)～

こちらでも天神山遺跡でのみ確認されています。円形で、直径は1m前後のものが多く、穴の中から複数の礫(石ころ)が見つかっています(図2)。この礫は、穴の底に接するのではなく、土の中に浮いた状態で見つかることから、お墓の中に遺体を埋葬した後で土を埋戻し、最後に礫を載せて埋葬していたと考えられています。このようなお墓は厚別や西岡台地で数多く発見されており、札幌市内の丘陵地帯の一般的な埋葬スタイルだったと考えられています。

## ～住居(竪穴住居)～

平岸坊主山遺跡で2軒、東山遺跡で2軒、天神山遺跡で11軒の竪穴住居跡が見つかっています。竪穴内には直径20～30センチメートルほどの穴が複数存在し、ここに主柱を建て、壁の周囲に細かい支柱を並べ、その上を乾燥させた草植物(カヤなど)の束などで覆って住居としていたと考えられています(図3)。住居の中央付近の土は黒く焦げた状態になっており、土器片や石で囲ったものも見つかっています(図4)。



図3. 平岸坊主山遺跡で見つかった竪穴住居跡。複数の主柱の跡があり、中央付近の土が黒く焦げている



図2. 土壙墓の平断面。礫が地中に浮いた状態になっている

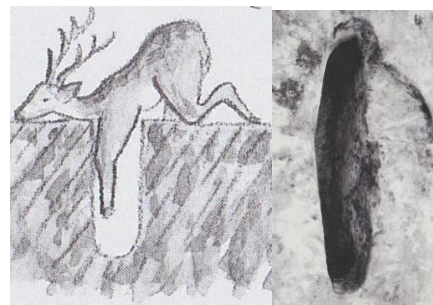


図1. 落とし穴の平断面と狩猟の想像図(さっぽろ文庫90「古代に遊ぶ」68ページより引用)

これは煮炊きのための炉の跡で、冬にはストーブとして代用していたと考えられています。竪穴は、円形のものも多く、楕円形や方形(四角)のものもあります。大きさは3〜4メートルのものが多いですが、天神山遺跡からは10メートルを超える大型の竪穴が1軒だけ見つかっています(図5)。住居としては必要以上に大きく、儀礼や祭祀の場として使われていたのかもしれない。

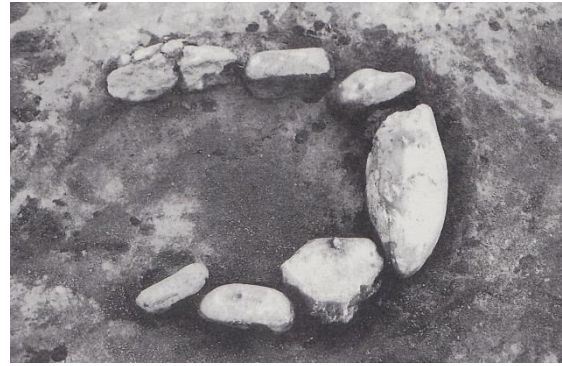


図4. 石で囲った炉跡(天神山遺跡)  
炉部分の土は黒く焦げている

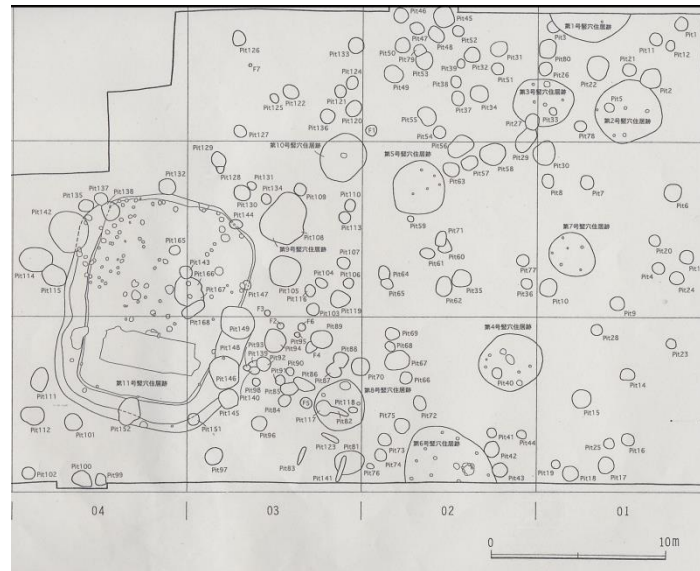


図5. 天神山遺跡の遺構分布図。図左の方形の竪穴住居の大きさが突出していることがわかる

謝辞：本稿の執筆にあたり札幌市埋蔵文化財センター藤井誠二氏には多くの有益な助言をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

参考資料 札幌市文化財調査報告書③、「T310遺跡」、札幌市教育委員会(1974)

札幌市文化財調査報告書四七、「T71遺跡」、札幌市教育委員会(1995)

さっぽろ文庫90、「古代に遊ぶ」、さっぽろ文庫編集室(1999)

バックナンバーお届けいたします。ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

〔編集後記〕 新聞屋の矜持

昨今の報道でご存知の方も多いでしょうが、先日朝日新聞が慰安婦の誤報を認める記事を掲載しました。その是非についてはほかに譲るとして、私が問題にしたいのは、これを絶好の機会として、他の全国紙が行き過ぎた朝日新聞叩きに行っていることです。わざわざフルカラーのチラシを作り、全世帯に配布し、拡張員をばらまき、バッシングを加速させています。私は、新聞屋の矜持として、このような下品な行動には断固として反対します。今回の誤報をどう判断するかは、読者に委ねればいいのです。この連載を始めたきっかけは、新聞販売所が地域に文化的にもっと貢献しなければ、道新だけでなく新聞業界の未来はないと思ったからです。揚げ足を取るような行動ではなく、もっと高い次元で競い合えばと残念に思います。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年室蘭市生まれ。金沢大学理学部地球

学科博士課程(古生物学専攻)を修了後、六花亭

に入社。2011年より現職。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

TEL: 0120-128-3480

FOX: 0120-128-3588

◆この連載は毎月1日・15日の北海道新聞朝刊に折り込みしています